



文化庁委託事業
「令和3年度障害者による文化芸術活動推進事業
(文化芸術による共生社会の推進を含む)」

事業報告書

こんにちは、 共生社会

ぐちゃぐちゃ の ゴチャゴチャ

2021

を振りかえる

text by Aya(DANCE BOX)

INTRODUCTION

「こんにちは、共生社会(ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ)」は、障がいの有無、経済状況や家庭環境、国籍やルーツなど、一人一人の＜差異＞を優劣という物差しではなく、独自性ととらえ幾重にも循環していく関係性を生み出すこと、そして同時代性・芸術性の高い作品の創造と、それらを享受・体験できる環境をつくり、関わる人すべてが新たな視点や価値観を見出すことにより豊かな社会が形成されることをめざし、2019年度にスタートしました。

3年目となる今年度は、障がいをもつ表現者、そして鑑賞の方法にこれまで以上にフォーカスをあてて事業を実施。

障がいをもつ表現者自身が公演を企画・構成し、自ら作品を演出・振付した公演『未見美(Mi-Mi-Bi)』は、彼ら自身が未だ経験してこなかった表現の領域へ一歩踏み込むこととなり、またこれまで個々に活動してきたメンバーが活動を展開するベースとしての新たなカンパニー(表現者集団)結成につながるなど、日本のパフォーミングアーツシーンにおける新たな動きにもつながりました。

一方で、事業を進める中、当然一人一人の考え方・価値観は異なり、コミュニケーションがすべてうまくいくわけではなく、無意識で誰かを傷つけてしまっていることもあります。正解がどこかにあるわけでもありません。自分も相手も大事にしながら話してみると聞き合うこと、これもとても大事な時間でした。

また、昨年度より月1回のペースで開催している「やさしいコンテンポラリーダンスクラス」は、場として定着しました。継続することの大切さを感じています。

舞台の上にも観客席にも、ワークショップにも稽古場周辺にも、多様な人がいる風景が神戸・新長田の小さな劇場では日常となっていました。芸術文化を通じて、自分とは違う人と出会うことで感覚することや新たな気づきが、自分を豊かにし、それがまた足元から社会を変えていく。その日常づくりが、このプロジェクトの本質かもしれません。

Contents

目次

- 03 トライアル・ダンス公演
『未見美(Mi-Mi-Bi)』
～未知なる見たことのない美しさ～
- 07 やさしいコンテンポラリーダンスクラス
- 09 釜ヶ崎芸術大学@新長田
ソケリッサと踊ろう！Let's Dance with Sokerissa!
～東京ホームレスダンスチーム・ソケリッサとほいさっさ！～
- 09 楽ちん堂がやってきた！
『オールジェネレーションズ発表会』IN 長田
- 10 特別支援学校へのアウトリーチ
- 11 山下残
『そこに書いてある』
(下町芸術祭2021参加公演)
- 13 矢崎悠悟×北村成美
『リバイバル・リバイバル・サバイバル』
- 15 「五感で楽しむ下町芸術祭ツアー」
(下町芸術祭2021参加企画)
- 16 Mentor Project 2021
『トーク・セッション』by Claire Cunningham
身体障がいのある振付家育成プログラム
- 17 ブリッジシアター
『障がいがある人の表現フィールド
～その後世界は変わるのか。パラリンピックを終えて～』
- 18 身体障がいのある人も！ダンスワークショップ
- 18 コミュニケーションと情報保障

トライアル・ダンス公演

『未見美(Mi-Mi-Bi)』

～未知なる見たことのない美しさ～

盲・聾を含む身体に障がいのある8名の個性豊かなパフォーマーが集結。自身の身体、自身の表現の可能性に向き合い、自ら創作したソロ作品と、グループ作品をオムニバス形式で上演しました。外部から演出家を呼ぶのではなく、パフォーマー自ら作品をつくり、他者の身体・表現にも踏み込むことに挑戦。盲・聾のパフォーマーのトリオなど、コミュニケーションのハードルの高いグループによる作品も生まれました。表現のバックグラウンドが異なるパフォーマーとの共同作業は容易ではなく、また、メンバーの体調不良、コロナ感染拡大ピークの時期など、向き合う問題は続出しました。その都度じっくり話し合い、協働メンバー・手話通訳・テクニカルスタッフ他総出で尽力し、本番を迎えました。

2022年2月5日(土)18:00開演、6日(日)14:00開演
6日のみ、アフタートーク(手話通訳付)

会場:ArtTheater dB KOBE

演出・振付・出演:大城桜子、KAZUKI.SO-MA、武内美津子、
田村みくり、福角幸子、福角宣弘、森田かずよ

協働メンバー:三田宏美、西岡樹里、内田結花、紅玉、文

手話通訳:三田宏美、久保沢香菜

舞台監督:北方こだち

音響:和田真也

照明:野村洋子、茂木紀恵





パフォーマンスレビュー

text by Takeda Mari

2月5日と6日、プロジェクトは本番の日を迎えた。ArtTheater dB KOBEで行われた公演の二日目の模様を、アフタートークと合わせてレポートする。

兵庫県は1月27日からまん延防止等重点措置期間に入り、本公演も実施に踏み切るか否か慎重に検討がなされたが、万全の感染対策を取ったうえで予定通り開催された。通常より数を減らした客席は、現下の状況でも今日の舞台を見届けたいとの思いで足を運んだ人々ではほぼ埋まっている。手話で会話をする人たちの姿も見られる。開演前の案内のアナウンスは舞台下手に立った手話通訳者(久保沢香菜さん)とホリゾントに投影される字幕によっても伝えられた。以下に、作品ごとにパフォーマンスの様子や受けた印象を記していく。

開演：まず出演者8人全員が舞台に現れ、観客と対面する。照明を受け、思い思いの衣装で舞台に立つ一人一人が表現者であり、8人が共同して作り上げた公演であることが伝わるオープニングだ。武内美津子さんが一人舞台に残り、プログラム一番、ソロ作品『いざなみ』が始まった。

視覚に障害のある武内さんは小さな歩幅でしずしずと歩き、動くたびに身についた鈴が音を立てる。数歩進んではくるりと一回りし、足で床をタンと鳴らす儀式のような動作。国生み神話に沿った場面が真っ赤な照明、黒・白・赤の布や衣装で象徴的に描かれ、この世の始まり、踊りの起源、生命の理(ことわり)を思わせる。祈りのような作品だ。

『自分だけ？いや、違う。』車椅子の田村みくりさんとSO-MAさんのデュオは、切ない恋心を歌うJ-POPの歌詞にのせた踊り。すれ違う歩行、手をつないで回転、SO-MAさんの腕の下を田村さんがぐぐり抜けるなど、互いの異なる身体で何ができるかを工夫した動きが目を引く。出会いの喜びと最後にやってくる別れは、男女に集約されない人ととの関係性の機微を思わせた。

『社会の半端者』KAZUKIさんは先天性のろう者で「手の表現者」。手話やマイム、指先まで駆使した緻密な動きで語りを紡ぎ、物語を伝えると同時に、ヴィジュアル的にも映える動きを独自のスタイルのソロ作品に仕立てた。心臓の鼓動、自分を切り裂く動作など葛藤を抱え

る自身の姿を描くが、映像を用いた最後のシーンで地球という大きな視野に立ち、希望につなげる。

『My Body』福角幸子さんのソロ。脳性麻痺による不随意の身体が生む表現は圧巻だ。震える指で示す「5, 4, 3, 2, 1」。手のひらで口、目、耳を覆い「く」「もく」「じ」と声を発する。くち、め、みみ、ではないことに福角さんの反骨の意思を感じる。「右」と言いながら差し出そうとする手は麻痺のために反対側へ動く。それでも渾身の力で右、左、上、下を指示してゆく。何かを解き放つように東ねた髪をほどくと、「つかむ」と発しながら手を宙に差し出す。車椅子の上で脚が引き攣れ、反対側の腕も大きくぶれるが、呟き、囁き、叫ぶように繰り返す「つかむ」の声に心を揺さぶられる。

『Mother』イサドラ・ダンカンの振付を踊る森田かずよさん。弟子が書き残したとされる舞踊譜に基づくダンスだが、森田さんの身体ではすべてを完璧には再現できない。そこに敢えて挑み、振付の継承と上演の個別性を問う批評精神に満ちた試みだ。障害のある森田さんが試みることで正否を超えたダンスアーカイヴへの視点が際立つ。憂いに富んだピアノ曲で柔らかく動くダンスが、亡き子を偲ぶダンカンの思いを引き継いでいる。

『遊ぼうよ』福角宣弘さんのソロ。車椅子を自在に操る気ままな散歩は福角さんの日常、自由な生きざまを映し出すものだろう。パフォーマンスの途中で車椅子を降り、腕の力で床上を進むと、再び車椅子に、いつもとは違う姿勢で乗る。障害のある身体と車椅子の固定化されたイメージを覆し、遊んでみせる心意気を感じる。スマホで撮ったリズミカルで抽象的な映像がコンテンポラリーな味を出している。

『溶け合う心』はKAZUKIさん、大城桜子さん、福角幸子さん、田村みくりさん、SO-MAさんによる集団創作。ろう者である大城さんの孤独な心に語り掛けるKAZUKIさん。手話の動きはダンスになり、リズムとステップが生まれる。そこに仲間たちが加わり、心を寄せ合う祝祭的なダンスシーンが花開く。『風になりたい』のサンバ調の音楽と5人のダンスに観客も心躍らせる幸福な時間となった。ここで第一部が終了。

休憩後、第二部の最初は、『ウィル・チャーエー×ウィル

スタッフ見せ 稲古場



Other Reviews

チエアー』田村みくりさんと福角宣弘さんのデュオ。様々な技を駆使した車椅子走行にワクワクする。二人の動線が舞台を行き交い、上体をひねればジグザグ走行、前輪を持ち上げて静止する技「ウイリー」も披露。途中で競技用車椅子に乗り換えると一段とスピードが増す。車椅子によって開かれ、拡張する身体の可能性を見た。

『孤独』SO-MAさんのソロ。日本語歌詞のヴォーカル曲をバックに、床に横たわったり足踏みで音を出したり、悲しみや苛立ちを含めた心模様が表現される。ブレイクダンスのキャリアを思わせるキレの良い腕使いやグルーヴ感と、型にとらわれないコンテンポラリーダンスの振付が融合し、音楽と相まって、誰しもが持つ歌心、踊り心を搖さ立てる。

『2:view』KAZUKIさんと福角幸子さんの掛け合いかが楽しいデュオ。幸子さんに教わりながらKAZUKIさんが車椅子に乗ってみると、ウイリーの技を決めてご満悦、或いは操作に手こずって汗を拭く場面も。互いの異なる身体が、生きる作法を交換しながら少しづつ理解を深めていく。コメディ調のマイムのやりとりがチャミングだ。

『最初で最後のLOVE SONG』大城桜子さんの歌と手話／身振りによるソロ。ろう者の大城さんの発音には子音などに特有の響きがあり、歌うメロディは聞いたことのないものだ。聞こえない大城さんの心の内で鳴っている音楽を、観客は耳を澄ませて真摯に聞くとする。「その歌をばくだけが知ってる」と歌う大城さんと、その孤独に心を寄せる観客とのあいだに、奇跡のような時間が生まれていた。

『和プラス輪』KAZUKIさん、SO-MAさん、福角宣弘さんの「男組みみび」によるトリオ。和太鼓が鳴り、それぞれの仕方で音に合わせリズムを取る。KAZUKIさんは床を叩く振動で他の二人とリズムを共有する。福角さんの腕の力で全身を宙に浮かせる力技、空いた車椅子に乗ってスキーと走るSO-MAさんの遊戲。3人の異なる身体で思い思いに動きを繰り出しつつ、要所でユニゾンを決める、男前の踊りだ。

『WATASHI』田村みくりさんのソロ。変化に富んだガーシュインの音楽「ラブソディー・イン・ブルー」で踊

る。照明もカラフルに変化した後、やはりブルー一色へ。車椅子を操作しながら踊る田村さんのダンスは、リズムを先取りし、音楽の根っこから躍動感を引き出し、踊る喜び、生きるエネルギーに溢れている。床に降りて手で車椅子をくるくると回す場面は、さながら車椅子とのデュオ。

『日本の四季』KAZUKIさん、大城桜子さん、武内美津子さんの3人が和服姿で春夏秋冬を表現。視覚障害者の武内さんと、ろう者であるKAZUKIさん、大城さんでは抱いている季節のイメージが違うという。互いの異なるイメージを幾重にも重ね、舞い散る桜の春を、床を踏む音で夏の雷を、和歌で秋の風情を、焚火で冬をと、手話を超えた手振りの巧みさと、手振り以外の多彩な方法を駆使して、季節の景色や風物を描き出した。

『あうからだ』森田かずよさんのもう一つのソロ作品。横たわる身体と床の関係、動きに伴う重心の変化など実況を語るナレーションと、並行する動き。森田さん自身による解説の言葉は自身の身体への振付であり、動きをその場でスケッチする記述・記録である。第一部のダンカン作品と並んで記譜／アーカイブに関わる興味深い取り組みで、森田さんの身体の固有性に大きく負ったドキュメントでもある。サティの音楽とともにしつとりと思慮に富んだ内省的なパフォーマンスだった。

全プログラム15作品が終了した。暗転の後、あらためてジャズのリズムが入り、カーテンコールの音楽が流れるとき、出演者8名が再び舞台に現れ、ラストの踊りで締めくくる。祝福に満ちた時間を惜しみながらの閉幕となった。

上演後、出演者揃ってのアフタートークでは、あらためて文化庁委託事業である本プロジェクトの意義について、文さんから説明があり、2019年に始動した「こんにちは共生社会 ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ」の一環として障害のある人もない人も、様々なルーツを持つ人も共に暮らせる社会の実現を目指すこと、障害がありプロフェッショナルな活動を行うコレオグラファー、ダンサー、アーティストのための創作環境を育むこと、外部から演出家を招かず自身で振付、演出を行う公演であること、11月末のキック・オフ・ミーティングで集まったメンバー全員で『未知なる見たことのない美しさ（未見美）』とタイトルを決めしたことなど、企画の趣旨が紹介された。

2日間の本番を終えた出演者たちからは、クリエーションの過程で得た実感や発見について貴重なコメントが聞かれた。今回のメンバーには異なる障害をもつ人たちが集まっている。SO-MAさんは今回初めて出会った障害ある人たちとダンスを踊ることに、最初は不安があったという。「男組」では互いの身体をよく知ることで、一緒に取り組んでいこうと決心できた。KAZUKIさんに（振動で）音を伝えなくてはと自ら責任を負い

つつ、ハンディキャップを共有し、支え合い、理解し合って作り、踊ることができたと「男組」メンバーへの感謝を口にした。

武内美津子さんも、見えない自分と聞こえないKAZUKIさん、大城桜子さんとの組み合わせで共演するにあたり、コミュニケーションをどう取るかに直面した。KAZUKIさんの出す音を聴いて自分がどこにいるかを知り、自分の出す音を（聴覚情報ではなく）振動によって伝えることでKAZUKIさんや大城さんと互いを把握し合ったという。共演したKAZUKIさんは、まずは互いに出来ることを話し合い、ともに日本で生まれ育ち日本に住むことに共通項を見出して日本の四季を描こうと決めた。取り組むうちに、見えない人の捉える四季と聞こえない人の感じる四季のイメージが全く違うことに気付いたという。このエピソードは観客にも大きな気付きをもたらしたようで、多くの人が頷いていた。障害者の間の違いのみならず、障害者と健常者、また健常者同士の間でも、物事の捉え方やイメージの違いはむしろ前提としてあるのだとすれば、違いに丁寧に向合うことが、それまで至ることのなかった豊かな表現やコミュニケーションを生むことを可能にするのではないかと思われた。

今公演では全員がソロをはじめ複数の作品に出演している。最も出演者数の多かった作品について、大城さんは、5人がみな初対面で障害の違いのみならず、個人のもつ欲求の違いといった難しさにも直面し、悩みながらミュージカルの台本を書いたと話す。聞こえない自分には考えを伝えることが難しいが、「すべてを言葉で書き留める必要はないのだと気づいたとき、心に抱えてきた苦しみを舞台の上で吐き出すことができた」と、皆で心を一つにして成し遂げた喜びと、次に繋げていく希望を語った。

障害によって身体が負う条件を必ずしも制約や負荷と捉えないコメントもあった。田村みくりさんは福角宣弘さんと会って、こんなにも車椅子のテクニックに長けた人がいるのかと驚いたという。今回デュオを組めたことが嬉しく、競技用車椅子も乗りこなしながら、どのような動きが可能かを楽しみながら追及した。

みくりさんや宣弘さんのように車椅子で多彩な技をこなす作品がある一方、福角幸子さんとKAZUKIさんのデュオでは車椅子を実際に使いこなすことの難しさ、車椅子を身体にフィットさせるために細かい工夫やコツがあることなど、当人以外では気付きにくい事柄に言及した作品もある。どのような障害も一つの側面でのみ語れるものではない。環境、道具、置かれた条件や状況と身体の間に最適解を見つけて生きる技法があり、そうした技法もまた多様であるのだ。

自ら作品を作るトライアルについて述べた人もいる。福角宣弘さんは振付をしてもらった経験はあるが自分でソロを振り付

けたのは初めてだという。舞台で何を表現したいのかを考え、「車椅子そのものを見せる」とのテーマに行きついた。毎朝の犬の散歩時に車椅子の荷物用ネットに入れたスマホに映った映像を、遊び心で使ってみた。その気負いのなさに、障害のある身体を抱えつつ自然体で生きていく、確かな姿勢を垣間見た思いがする。

福角幸子さんも初めてのソロの振付にあたり、他の人より動ける範囲が少ない自身の体で何をどう表現するかを考えた末に、自らの不随意運動をテーマにすることを選択した。字幕を付ける（手話通訳の三田宏美さんがスケッチブックに文字を書いて舞台端から客席に示す）ことは昨日決めたという。上、下……と発語することの意味をどこまで伝えられるか、伝えるべきか、表記も含めて皆で考えた。伝えること、コミュニケーションの作法への配慮とこだわりを追求した舞台でもあった。

自らの表現を振り付けることは、自らの欲求や生き方をみつめることでもあるだろう。森田かずよさんの二つのソロは、障害ある身体がダンスを踊ることの意味を根本的に思考しようとすると姿勢が形になった。第二部で発表した作品では、自身の踊る身体がどのような感覚を経験しているのかを、内側で感じることと外側から見ていることの双方から言葉にしてみた。自分の言葉を録音する、いわばオーディオのスコアを作ることを振付の方法の一つとして面白く思ながら試したという。これについて文さんから、同じ方法でデュオの相手など自分以外の人にも振付ができるのではないか、と前向きな応答があった。障害のあるなしに関わらず振付と身体、感覚、意識の関係を考察する興味深いトライアルと言えるが、森田さんに固有の身体の在りようがあつてこそ見出された方法論でもあり、ここからの議論の広がりを予感させる。

最後に、ファシリテーターとして共に走ってきた文さんは、自身で作品をつくる今回の経験を出発点に、たとえ短くとも、この自分の身体とはどのようなものであるかと考えながら、是非これからも作っていって下さいとダンサーへ向けて言葉を贈った。またその場にいたすべての人に向けて「この日が始まり」であり、「障害のある人の」と言う必要のない社会の到来を願い、来年、再来年とプロジェクトを続けていきたいと希望を語り、終幕となった。



竹田 真理 (Takeda Mari)

ダンス批評。関西を拠点にコンテンポラリーダンスを中心とした取材・執筆を行。毎日新聞大阪本社版、舞台芸術評論紙「Acht」ほか一般紙、舞踊専門誌、公演パンフレット、ウェブ媒体等に寄稿。ダンスを社会の動向に照らして考察することに力を注ぐ。国際演劇評論家協会会員。

やさしい コンテンポラリー ダンスクラス

小さい子どもからシニアまで幅広い世代の、障がいのある人もない人も、それぞれのペースを大事にしながら一緒に身体とダンスを楽しむクラス。まずは自己紹介をしてその日の参加者を知り合ってから、ストレッチ。その後、空間を感じたり、音に合わせたり、道具を使ったり、誰かと一緒に踊ったりしました。この場にまちがいや失敗はありません。その日の踊りを楽しみます。親も子どもも会社員も学生も、肩書や役割を外し一個人として参加できるゆるやかな場は、新たなコミュニティであり、その真ん中に、身体と表現があります。2020年秋より月1回開催し、豊かな時間が定着してきました。

クラス紹介



開催概要:

- ①2021年5月30日(日) 11:00-12:00 会場:オンライン
- ②2021年6月13日(日) 10:30-12:00 会場:ArtTheater dB KOBE
- ③2021年7月4日(日) 10:30-12:00 会場:ArtTheater dB KOBE
- ④2021年8月29日(日) 10:30-12:00 会場:ArtTheater dB KOBE
- ⑤2021年9月12日(日) 10:30-12:00 会場:神戸アートビレッジセンター
- ⑥2021年10月3日(日) 10:30-12:00 会場:神戸アートビレッジセンター
- ⑦2021年11月13日(土) 10:30-12:00 会場:ArtTheater dB KOBE
- ⑧2021年12月5日(日) 10:30-12:00 会場:ArtTheater dB KOBE
- ⑨2022年1月30日(日) 10:30-12:00 会場:ArtTheater dB KOBE
- ⑩2022年2月13日(日) 10:30-12:00 会場:ArtTheater dB KOBE
- ⑪2022年3月20日(日) 10:30-12:00 会場:ArtTheater dB KOBE

対象:踊ってみたい方はどなたでも

参加形態:単発の参加でも、連続の参加でもOK

参加費:カンバ制

ナビゲーター:西岡樹里





釜ヶ崎芸術大学@新長田

ソケリッサと踊ろう！ Let's Dance with Sokerissa!

～東京ホームレスダンスマチム・ソケリッサとほいさっさ！～

ソケリッサのメンバーとともに、振付家アオキ裕キさんの言葉から発想して自分だけの形や動きを生み出すことを楽しむワークショップ。今回は2日目に舞台上でショーアイデアを行いました。初めてダンスに出会う親子も視覚障がいの参加者も、言葉・イメージ・動きをそれぞれに紡ぎ交換して、皆で〈場〉を立ち上げ、観客と共有する時間は、一人一人がありのままそこに存在することのできる豊かな時間となりました。例年継続してきた事業ですが、今年はショーアイデアに踊る手話通訳士の三田宏美さんに入っていただき、詩人の上田假奈代さんの言葉も手話で語っていただきました。

ワークショップ

2021年11月6日(土)14:00-16:00、11月7日(日)13:00-15:00

ショーアイデアとトーク

2021年11月7日(日)16:00~18:00(手話通訳付き)

会場:ArtTheater dB KOBE

講師:新人Hソケリッサ!

トーク出演:ソケリッサ、出演者、上田假奈代

共催:NPO法人こえことばとこころの部屋cocoroom



楽ちん堂がやってきた！ 『オールジェネレーションズ発表会』IN 長田

練習して磨き上げたモノをみせる会ではなく、どんな風に生きていきたいかを人前で模索する瞬間を「みせあいっこ」する発表会。演出家の故 森田雄三氏が確立した演技経験のない参加者で面白い舞台をつくる手法を用い、その場で立ち上がる言葉・行為・動き・歌などで、物語を立ちあげるワークには、生きづらさを抱えた人も含めた多世代の参加者が参加しました。会場にはおやつやおにぎりも並び、食べたいときには好きに食べてもいいという自由度が担保されていて、自分のペースで参加できます。森田氏の遺志を継ぐ東京・神戸のメンバーの協力のもと、この事業の中では演劇という新たなアプローチのワークショップとなりました。

① 2021年9月25日(土)、② 2021年9月26日(日)

③ 2021年10月2日(土)、④ 2021年10月3日(日)

⑤ 2021年11月13日(土)

会場:ArtTheater dB KOBE

講師:石田香織、妙嶋誠至

エグゼクティブプロデューサー:森田清子

共催:楽ちん堂(特定非営利活動法人ら・ら・ら)

特別支援学校へのアウトリーチ

当事業としてははじめての、聴覚特別支援学校でのワークショップ。学校等での身体を通じたコミュニケーションワークの経験豊富な田中幸恵さんをメインナビゲーターに、自身も聴覚障がいのある松島亜希さんと、踊る手話通訳士の三田宏美さん他、当事業のサイレントチームで取組みました。まずは事前に保育相談部～高等部までの全クラスの授業の様子なども見学させていただき、カリキュラムを構築。参加した生徒は、マネから入るウォーミングアップや、二人一組の言葉を介さないワークなど、日常とは異なる身体の感覚を楽しみました。

2021年12月14日(火)11:40~12:30

会場:兵庫県立聴覚特別支援学校 体育館

ナビゲーター:

田中幸恵、松島亜希、文、三田宏美(兼 手話通訳)

対象:中学部生徒 12名



山下残ダンス作品

『そこに書いてある』

下町芸術祭2021参加公演

山下残『そこに書いてある』は、体験するダンス作品です。観客は、100ページある1冊の本を膝の上に置き、振付・演出の山下残氏と手話通訳者のナビゲートのもと、舞台と本を往復しながら、言葉とダンスのあわいを楽しめます。2002年に初演された作品の神戸・新長田での再演は、地域のおじさん合唱グループ「ビッグ腹ダイス」と、群馬・前橋のダンサー山賀ざくろさん、そして地元の子どもやろう者を含めた手話歌グループも登場。1冊1冊丁寧に仕上げられた本には様々な工夫が施され、持ち帰ることができます。下町芸術祭2021劇場公演として、幅広い観客に鑑賞いただきました。

2021年10月16日(土)19:00 開演

17日(日)11:00開演 / 15:00開演

会場:ArtTheater dB KOBE

出演:畠中良太、益田さち、宮北裕美、山下残、三田宏美、大城桜子、KAZUKI、中村千穂、西村京子、合田果央、田口葵彩、小菅葉月、首藤心優、首藤勇雅、山賀ざくろ、ビッグ腹ダイス【中谷紹公、綿貫功一、衣笠宥清、山本豊久】

ブックデザイン:納谷衣美 手話通訳:三田宏美

舞台監督:浜村修司 音響:宮田充規

照明:三浦あさ子、青山愛

協力:水野響子(本製作)、中井敦子(イラスト)、

荒木瑞穂(前口上・おかん)





矢崎悠悟×北村成美ダンス作品

『リバイバル・リバイバル・サバイバル』

関西コンテンポラリーダンス界のパイオニア矢崎悠悟(元ヤザキタケシ)と、関西を拠点に全国で活動を展開する北村成美によるダンス公演。北村振付の『i.d』を矢崎が踊り、矢崎振付の『不条理の天使』を北村が踊り、そして新作デュオ『ランランラン』は、長年ダンス経験を積み重ね、人生をもサバイブしてきたユーモアや哀愁を感じさせる2人のダンスが上演されました。この公演には、視覚障がい者のための鑑賞ガイドを初めて導入しました。

2022年1月7日(金)19:00開演

8日(土)14:00開演 / 19:00開演

8日(土)14:00の公演のみ、終演後にアフタートーク(手話通訳つき)、託児サービス、見えない人にも楽しんでいただくための鑑賞ガイドあり。

構成・演出・振付:矢崎悠悟、北村成美

助成:神戸市(KOBEアート緊急支援事業(舞台芸術施設支援))





『五感で楽しむ下町芸術祭ツアー』

下町芸術祭2021参加企画

#1のツアーは、視覚情報で鑑賞しがちな芸術作品を、視覚以外の身体のいろんな感覚をひらいて鑑賞しました。視覚障がい者の武内美津子さんと一緒に芸術祭の開催される下町を巡りました。見ているだけでは気づかない発見もあり、感じ方が細かくなつていくよう。ツアーの最後は下町芸術祭の開幕式を鑑賞しました。

#2のツアーは、ダンス公演 山下残『そこに書いてある』(手話通訳つき)を鑑賞したのち、展示プログラムを＜発話無しで＞巡りました。受付時に、スケッチブックとペンが渡され、まずは、自己紹介。はじめはぎこちなかつたコミュニケーションもすぐに慣れ、いつもと違う鑑賞体験からコミュニケーションが拡がりました。

ツアー#1「見えない人と楽しむ1日」

2021年10月9日(土) 11:00~15:30頃

ナビゲーター：武内美津子

ツアー#2「サイレントでも楽しもう！ダンス公演と芸術祭」

2021年10月17日(日) 10:50~15:00頃

ナビゲーター：文、田中幸恵

会場：下町芸術祭会場及び、新長田界隈



Mentor Project 2021

『トーク・セッション』

by Claire Cunningham

身体障がいのある振付家育成プログラム

世界で活躍する身体障がいのある振付家を招いた、将来振付家になりたい人たちのためのプログラムをスタート。第1回目となる今回は、英国と日本を結びオンラインでのトークセッションを行いました。

クレア・カニングハムがなぜ、振付家になりたかったのか、どのようにして振付家になったのか、振付家としてどんな考えを持ち、どのような活動を行ってきているのかなどを、動画とトークによって紹介していただきました。オンラインにて開催したため、全国から障がいのあるパフォーマーや研究者も参加してくださいました。

2022年3月9日(水)19:00-21:00

オンラインにて開催

トークゲスト：

Claire Cunningham(クレア・カニングハム/イギリス)

司会進行：

文(NPO法人DANCE BOX)、
伊地知裕子(クリエイティブ・アート実行委員会)

共催:クリエイティブ・アート実行委員会

Mentor Project 2021

『トーク・セッション』 by Claire Cunningham

身体障がいのある

振付家育成プログラム

2022

3/9(水)

19:00-21:00



クリエイティブ・アート実行委員会[多様性を育むダンス&美術プロジェクト] &
NPO法人DANCE BOX[こんにちは、共生社会(ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ)]
Photo:Colin Mearns

ブリッジシアター

「障がいがある人の表現フィールド」

～その後世界は変わらぬか。パラリンピックを終えて～

2021年8月に開催された東京パラリンピック2020開会式。そのセレモニーのラストを飾ったダンサーの森田かずよさんを迎え、障がいをもつダンサーにとって現在の舞台芸術シーンがどう見えているのか、当事者の目線からお話をいただきました。また、2019年よりスタートした文化庁「障害者等による文化芸術活動推進事業（共生社会の推進を含む）」の担当リーダーである川村匡さんと、ダンスボックスの大谷燠を交え、パラリンピック開会式を経て社会の視線の変化や、障がいのある表現者の活動の可能性について語っていただきました。

2021年10月19日(火)19:00-20:30

会場：アートエリアB1、オンライン

ゲスト：

森田かずよ（義足のダンサー）

川村匡（文化庁地域文化創生本部総括・政策研究グループリーダー）

大谷燠（NPO法人DANCEBOXエグゼクティブ・ディレクター）

カフェマスター：文（NPO法人DANCEBOX事務局長）

共催：アートエリアB1



身体障がいのある人も！ ダンスワークショップ

このワークショップでは、「踊ってみよう！ひとりひとり異なる身体からのダンスへのアプローチ」をテーマに、振付家でありダンサーの矢崎悠悟さん、岩渕多喜子さんとともにダンスに取り組む時間をつくりました。身体障がいのある人もその身体で踊る可能性を拓げ、ひとりひとり自身も知らなかつた新たな身体の使い方や感覚を発見していました。車いすを使っている人も、視覚障がいのある人もない人も、骨で動くことや重心を感じるなど様々な視点からアプローチし、自身の身体と参加者互いの違いを通じて新たな表現を模索しました。

①2021年7月18日(日) 13:00-15:00

講師：矢崎悠悟 会場：ArtTheater dB KOBE

②2021年7月28日(水) 18:30-20:30

講師：岩渕多喜子 会場：ArtTheater dB KOBE

コミュニケーションと情報保障

Ⅳ 視覚障がい者のための鑑賞ガイド

実施公演：矢崎悠悟×北村成美『リバイバル・リバイバル・サバイバル』
開演1時間前に劇場に入り、劇場の形状やステージの広さ、視覚以外の公演を作り出す要素や公演の構成を伝え、ダンサーの身体に触れ、声をきく時間も作りました。座席はできるだけ空気感の伝わりやすい最前列に着席。上演中はご自分で鑑賞していただき、上演後に複数人から、どのような公演だったのかを伝える方法を試みました。

手話通訳

多数のプログラムに手話通訳を導入しました。

字幕

実施公演：『未見美(Mi-Mi-Bi)』

公演の一部、音声に言葉が入る部分のみ字幕を投影。
文字のサイズ、投影する位置など課題は残りました。

コミュニケーション

ミラーリングのソフトを使用しました。



こんにちは、共生社会

ぐちゃぐちゃ の ゴチャゴチャ



主催:文化庁、NPO法人DANCE BOX

企画制作:NPO法人DANCE BOX